

# 障害児・者のきょうだいにおける感情の抑制および表出体験が同胞観に与える影響

国際文化研究科 国際文化専攻  
臨床心理学研究分野 博士前期課程  
2025年3月修了

岡田 亜弓

主査 小林 純子 副査 久保田 進也 命婦 恭子

## 研究背景

「きょうだい」とは、障害のある者と兄弟姉妹関係にある者のことである。国内に推定664万人前後存在すると言われており(みんなの障がい, 2021)、家族の中で障害児・者とは別の視点から支援を必要とする存在とされている(柳澤, 2007)。きょう代いは、同胞に対して様々な否定的感情を経験し(Aksoy et al., 2008)、それらを抑制することで強い葛藤を経験する(大瀧, 2012)。一方で、同胞のことを話せる環境や存在により気持ちの整理が進むことがわかっている(長澤, 2009)。

## 研究目的

きょう代いは、成長に伴い同胞を肯定的に認識していくようになるが(阿部, 2015; 関根ら, 2021)、きょうだいには、時間が経っても納得できないままの未消化の思いのような、肯定的に捉えきれない思いも存在するとされる(清水, 2022)。肯定的な同胞観の裏には相反する複雑な同胞観がある可能性があり、同胞観には感情を抑制する働きが影響していることも考えられる。しかし、過去の感情抑制・表出体験が現在の同胞観にどのように影響するかは明らかになっていない。そこで本研究では、きょうだいにおける感情の抑制・表出体験が、現在の同胞観に与える影響を検討する。

## 研究概要

### 【方法】

20代後半～30代後半の障害児・者のきょうだい男女4名を対象とし、「同胞と過ごす中での心理的变化」「感情の抑制体験」「感情の表出体験」「同胞観」について半構造化インタビューを実施した。そして、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)に準じて分析を行った。

### 【結果】

分析の結果、91個の概念が生成され、46個のサブカテゴリー、14個のカテゴリー、2個の大カテゴリーが抽出された。それらをもとに、ストーリーライン、結果図を作成した。その結果、きょう代いが現在の同胞観に至るプロセスにおいて、【きょう代いが今抱く同胞観】は、<きょうだいの意識や関わり方の変化>、<親への思い>、<同胞の影響を受けて生じた対処傾向>の3つのカテゴリーとの相互関係が重要であることがわかった。

【きょう代いが今抱く同胞観】自体には、否定的な側面は含まれなかった。しかし、感情の抑制については、<怒りを我慢する> <あきらめる> <抑える> <裏返しの表現をする> <積極的に同胞の話をしていない>など豊富に語られており、きょうだい自身の人生において、思いを抑制すること自体が、ありふれた現象として起きていた。しかし、それをそのまま同胞への思いとしてぶつけずに、自分の人生に活かそうとする姿があるのではないかと、<親を思いやる気持ち>や<同胞がいたことで強みを得る>からみてとれた。そして、そうしたことができていたために、【きょう代いが今抱く同胞観】として、肯定的な側面が多くみられたのではないかと考えられる。

## 成果・まとめ

きょうだいへの支援において、背景にある家族構成や同胞の障害など、バックグラウンドを理解することはもちろん重要である。しかし、本質的な状況として、自分(きょうだい自身)には障害はなく、同胞という極めて近い立場の人間に障害があり、その存在を思いながら育ったという経緯には、複雑な心理的抑制と家族であるがゆえにその思いを素直に言葉にしにくい状況がある。そのことを、支援者側が汲むことがなにより、きょう代いが自分を理解された、サポートされたと感じる一步であると思われる。



### 指導教員コメント

本研究は、きょうだい者へ同胞観にまつわるインタビューを実施し、M-GTAにおける分析を行っており、日本では未だ実際の支援があまり進んでいない研究分野に意欲的に取り組んでいます。きょう代いが抱える複雑な心性プロセスや、同胞観の変容可能性を見だし、同胞観と過去の感情抑制・表出体験の関係性の一端を示しています。本研究の成果は、今後のきょうだい児・者の支援プログラムを構築するための、一つの知見となると考えられます。

小林 純子

### ○結果図

